

# まぶの教育

岐阜県教育懇話会  
〒503-0023  
大垣市笠木町 229-5  
(0584)91-2478  
Eメール 0900-3-5390

編 組

「われわれは歴史と伝統を改変し、日本にかきわ  
しい中流の教育を推進する。  
われわれは教育と品性の向上につとめ、自覚愛  
の精神とともに、明るく豊かな教育を推進する。  
われわれは個人の自主的進取を奨励しつつ、政治  
的中立を厳守し、主体性を堅持する。」

## 【巻頭言】

### 関谷清景博士の地震学研究と

#### 矢橋亮吉店主の育英事業

京都産業大学名誉教授 所 功

### 大垣藩校出身の関谷清景博士

日本列島では太古から地震が多  
く、その調査・研究も長らく行われ  
てきたが、それを本格的に創められ  
たのは、関谷清景博士である(橋本  
万平氏著『地震学事始』開発者・関  
谷清景の生涯)。昭和五十八年、朝  
日選書など(参照)。

清景(幼名鉉太郎)は、ペリーの  
再来した安政元年(一八五四)に大  
垣藩士関谷立助の長男に生まれ、数  
え七歳から十年近く藩校で学んだ。  
十七歳の明治三年(一八七〇)、全  
国から優秀な人材を東京へ集めるた  
め「賈進生」に選ばれ、大学南校  
(まもなく開成学校、のち東大の  
法・文・理学部)で英語により工学  
を学び、同九年(一八七六)英国に  
留学している。

東大構内に「地震学実験所」を設け、  
「地震観測の報告心得」を作って全  
国に配り、同十八年(一八八五)「地  
震を前知(予知)する法如何」とい  
う世界的に評価の高い論文を発表し  
た。その翌年、帝国大学理科大学で  
地震学の初代教授となっている。  
さらに日本で最初の理学博士とな  
った明治二十四年(一八九二)の十  
月、マグニチュード8クラスの「濃  
尾大地震」が発生すると、その全体  
を徹底調査しなければならぬと政  
府に要望して、被災地の大垣を自ら  
視察した。その翌年、文部省所管の  
「震災予防調査会」を発足させ、委  
員として積極的に活躍したが、四年  
後(41歳)結核で他界している。  
このような理工学の大先達などを  
送り出した大垣藩校(教道館+敬教  
堂)は、天保十一年(一八四〇)第  
八代藩主戸田氏庸により設立され  
た。それから三十年後の慶應義直  
前、藩の賈進生として選ばれたのは、  
関谷の他に松本莊一郎や和田(のち  
松井)直吉である。

松本は大学南校から米国に留学し  
て工学を究め、東大の工学科教授と  
なり、明  
治二十一  
年(一八  
八八)日  
本初の工  
学博士号  
を授与され、鉄道の全国敷設に尽力  
している(その長男が戦後「帝国憲  
法」の改正案を作った松本丞治博  
士)。また松井も大学南校から米国に  
留学して鉱山学を修め、同二十一年  
に理学博士を授与され、東大の農科  
大学長(二時大学総長)を務めてい  
る。そのような基礎を養った藩校の  
功績は大きい。

### 岐阜出身の矢橋亮吉店主

叙上のような学者とは異なり、実  
業家として地元にも多大な貢献をした  
のが、矢橋大理石店主の矢橋亮吉氏  
である。

亮吉は慶応三年(一八六七)、不破  
郡赤坂村(現大垣市赤坂町)で矢橋  
本家の宗太郎五男として生まれ、明  
治十六年(一八八三)岐阜中学を卒  
業して東京商業学校(現一橋大学)  
に進んだ。その在学中、前述の関谷  
博士の家で書生として鍛えられ、あ  
らゆる雑役を務めた。この間に、岐  
阜中学で貧困のため中途退学した同  
級生を助けられなかった悔しさと、  
世話になった博士の教えに恩返しを  
したいという思いから、早くも濃尾

大震災の翌年(明治二十五年)、二十  
六歳で月給の一部を割き育英の援助  
を始めている。

ついで同三十四年(一九〇一)器  
蔵)矢橋大理石を創業して代表とな  
り、大正五年(一九一六)濃尾農工  
銀行の頭取に就任する一方、岐阜市  
内に中学校・商業学校の生徒寄宿舎  
「楠堂」を設け、生徒と寝食を共に  
した。その楠堂には自分の息子も入  
れ、他の生徒と同様に雑役を務めさ  
せ、心身を鍛えている。

さらに大正九年(一九二〇44歳)  
八月、二十万円を基本資金として「矢  
橋謝恩会」を設立した。それは、「い  
つも今あることに感謝し、先祖の尊  
い志を受け継ぐ」ため、①有為の青  
年で家の貧しい者に学資を給与する  
こと、②岐阜の図書館を援助するこ  
と、③社会改善の事業に援助するこ  
とを目的に掲げている。

やがて昭和に入り不況で苦しくな  
っても奨学育英事業を続けた。同二  
十一年(一九四六)一月、戦災地巡幸  
中の昭和天皇を赤坂本店の西洋館に  
お迎えする荣誉に浴したが、その九  
月末に他界している(89歳)  
ちなみに、私も大垣北高から大学  
に進学して勉学できた要因は、斉藤  
校長先生の推薦によって矢橋奨学生  
に選ばれ、四年間奨学金を支給され  
たからである。(令和三年三月十一日稿)

## 時論

これは三月二十八日、岐阜市で行われた現代国史講座の内容を編集部の責任でまとめたもので、詳細は秋発行の雑誌第十四号を御覧下さい。

## 華人文化圏における

## 儒教復興の光と影と

聖愛学院大学准教授 横久保義洋

## 一 はじめに

一般に中国は言論統制されていると思われているが、共産党を否定的に書かれた本が堂々と出版され、共産党の人達が称賛すらしている書物もある。それは現代の新儒家と言われる人の著書だからで、中国では何を言ったかが問題ではなく、誰が言ったかが問題なのである。

## 二 近現代の儒教

近現代に西洋の学問あるいは科学・技術・文化が大挙して東アジアに入り込んで来た。中国では日本より少し後の明代末期に宣教師が入り、大きなエポックとなったのが一八四〇年のアヘン戦争である。西洋の思想・文化に触れ、始めのうちは日本以上に抵抗が大きかったが、伝統的なものとのように関わりをもたせざるか、日本も苦悩したが、中国は違った対応をしている。

中国では西洋の学問を西学と呼び、それに対して伝統的な学問である儒学を国の固有の学問という意味で、

国学と呼んで再編成をした。それは大きく分けて二つになる。

一つは漢学で、漢と唐の時代の経書を中心とした学問である経学と、それを受け継いで清朝の時代に発展していった清朝考証学と呼ばれるものである。

二つ目が宋学で、宋と明の時代の学問。これは朱子学、陽明学と二つに分かれるが、ひとまとめに宋学と言っている。

大まかに言うと、漢学は文献学が中心で、宋学は文献学に併せてそれ以上に哲学もしくは倫理学を重視している。ただし、十九世紀に入ってから、「漢宋一致」として国学をまとめる努力がなされ、西洋の進出に対する危機感の原動力となった。

十九世紀の末期、日本にならって憲法を制定し、立憲君主制の国を作ろうとした康有為がいた。彼は西洋の国々はキリスト教が国教として国民をまとめていると気づき、中国も孔子を教祖とした儒教をそれに充てたらよいと考えた。キリスト教の教会のように「孔教会」というものを作り、一旦は成功しかけたが、反撃にあつて日本に亡命をしている。

章炳麟（章太炎）は儒教を宗教化せず、特に文献考証の方から儒教の本質に迫ろうとした。彼は上海、日本を中心に活動をして、「国粹保存

会」という学会を作り、支那の學術文化は優れたものとして学会誌『国粹学報』を発行し、国学の概念を打ち出した。それは純粋な學術誌に見えるが、主旨は漢民族の本来の文化の姿を見出し、満洲人の清朝を倒して、漢民族の国を復興させるといった政治的な動機もあった。一九二二年、中華民国が成立するが、儒教を尊重するという動きは主流にあつた。

一方、陳独秀、李大釗、或いはアメリカに留学していた胡適などは、一九一五年、雑誌『新青年』を発行して、儒教のような古いものは投げ捨てて西洋の新しい文化、デモクラシーやサイエンスを全面的に受け入れなければならないと反伝統、全面西洋化を主張した。

それに錢玄同という人がタイアップし、国を強くするには徹底的にやるしかない。エスペラントを国語にしようとしてまで言い出した。しかし、四五年して『新青年』も意見が分かかれ、陳独秀、李大釗はマルクス主義に走り、中国共産党を創設する。一方、それに反発して胡適は自由主義の側に立つことになる。

『新青年』にはライバルがいて、南京の東南大学を中心とした王国維、胡適などが雑誌『学衡』を出し、支那の伝統を根本にすえて、その価値を認識しようとした。そして、東西

の古典文化の融合を目指し、『新青年』の新文化運動に反対して、文化保守主義を主張した。

『新青年』分裂後、胡適は「国故整理運動」を始め、古いものを見直して批判的に継承しようとした。国故は国学と同じようなものである。

胡適の学生であつた顧頡剛は、『古史辨』という雑誌を発行し、昔書かれた歴史などは偽作が多いとして疑問を呈した。それらの人々を疑古派と言うが、それに対して学衡派からもいろいろな反論があつて、論争に次ぐ論争が一九二〇年代から三〇年代に繰り返された。

一方そういう文献学の方面だけでなく、哲学の方面でも宋学、特に朱子学や陽明学を究めて、これをカントとかベルクソンの西洋哲学で解釈しようという梁漱溟や馮友蘭、張君勱、熊十力という人が現れた。いずれも西洋哲学と朱子学、陽明学を結合しようとする。こういう人々を現代新儒家と呼んでいる。

中華民国時代は、伝統的な学問の研究が盛んに行われ、国学の私塾のようなものができた。例えば一九二〇年に唐文治が「無錫国学專修学校」を作り、章炳麟が一九三四年に「章氏国学講習會」を作っている。

大学でも国学の研究ができて、有名なのが清華大学の「清華国学研究

院」である。

こういう時代になると優れた学者を「国学大師」と呼んで尊敬する風習も出来た。この頃権力を握っていた国民党も伝統の復興を主張していたのだが、国民党系の学者が中心になって一九三五年に「中国本位文化建設宣言」を出し、中国は西洋を中心としたものでなく独自の道を歩むのだという主張をしている。

一九四九年、国民党が内戦に敗れて共産党が天下をとると、状況が一変し、儒学の立場にたった活動は出来なくなる。胡適などはアメリカに亡命して、一九五〇年以降から激しい批判が行われ、共産党はその業績を完全に否定している。大陸に残っていた胡適の弟子顧頡剛などは真っ先に師匠を裏切った。梁漱溟は初め共産党を批判していた。支那事変以降、次第に共産党と協力関係を結ぶようになるが、結局は意見が対立して失脚し、三十年近くにわたって行方不明となる。

大陸では共産党の天下となつてから、儒学・国学は休眠状態になっていく。ただマルクス主義の立場から伝統文化を研究することは許された。それから文革にいたるまでの十七年間、儒学に対する肯定的な評価をするのが主流であったが、文化大革命によって支那の儒教の伝統は断たれ

てしまった。ごく少数の者が、共産党のやり方に気づいて大陸を脱出し、香港、台湾で儒学の伝統を受け継ぐことになった。

それが「港台儒家」と呼ばれている人々で、その代表が錢穆という二十世紀支那最大の国学者、歴史家である。彼は同志とともに、大陸で失われようとしている支那の伝統文化を守るため、香港で新亞書院という学校を作っている。

その後、一九五八年、香港、台湾に亡命していた唐君毅を中心とした張君勱、徐復觀などが、一為中國文化敬告世界人士宣言」を連名で発表している。これは中国伝統文化には普遍的価値がある。その価値が西洋文明と結合して世界文化への貢献もすることができるとのこと。ということを譲りあげたもので、新儒家宣言と呼ばれている。これが反共産主義の立場に立つ公式の宣言になってくる。

現在では、これらの第一世代の人は亡くなっているが、この後を継ぐ第二、第三の儒家が出てくる。その後、文革に対抗するため、台湾の国民党政府は、中華文化復興運動を始め、儒教の古典などを今注、今訳、つまり儒教の古典を現代語に翻訳し、注釈書を作ったりした。中華文化復興の一環として他に孔子廟の再建なども行った。

### 三 儒学の復活

鄧小平の時代になると、今に続く改革開放政策が行われ、外国や特に香港や台湾の資本・技術を導入するようになる。するとそれに付随して思想・文化も入ってきた。ちょうど文革の影響もあって、人々の心も冷め切っており、毛沢東の思想も信じられなくなっていた。そこへ外から新しい思想が入り込んできて、皆それに飛びついていく。新しい思想と言っても、かつての一九二〇年代の新文化運動のころ、つまり半世紀前に行われていたものの再現と言ってもいい。その結果、価値観が多様化していく。そこで一九八〇年代は「文化熱」ブームが起きる。当時の思想潮流としては、考え方が三つあった。

一つはマルクス主義

二つめはリベラリスト、自由主義、リベラルの考え方

三つめは香港、台湾から再輸入された現代新儒家の思想

この三者の中で活発な論争も起こってきた。一九八〇年代にはリベラルの人が多かったが、一九八九年六月四日に天安門事件が起き、また様相が変わってきて、西欧的な考え方は批判された。

九〇年代になると、打って変わって共産党が伝統文化の擁護に出てきた。八〇年代の「文化ブーム」に代

わって「国学ブーム」が起きた。それが今につながってくる。国学という概念は共産党政権が出来てから忘れ去られていたが、復活してきた。

そして共産党、政府は毛沢東時代とは掌を返したように伝統文化を尊重するようになる。江沢民以降、マルクス・レーニン主義に代わって儒学を国の根幹にすえるようになってきた。江沢民、胡錦濤、習近平と代を継るにしたがってヒートアップし、習近平になって頂点に達した。ただし、まだ初めのうちは儒学とマルクス主義を融合させるといふ、言わば「儒馬一致」という考え方が主流を占めていた。公式には今でも「儒馬一致」と言っているが、ここ二十年くらいは、完全に放棄されている。マルクス主義も放棄され、儒教を前面に押し出すようになっていく。

一九八四年、「中国孔子基金会」というものが作られ、これが後にあちこちに出来る儒教関係の学界・団体の走りになっていった。最近、孔子学院が話題になるが、海外に語学を普及させるといふのが目的で、単に中国文化の象徴として孔子の名前を使っているにすぎない。

孔子基金会の方は孔子学院と違って本格的に儒教、孔子の教えを復興するという運動を行っている。最近では二〇〇六年に孔子像を標準化し

た。孔子標準像を造って各地に建てている。

大学でも民国時代のように国学研究が復活している。小中学校の授業にも取り入れられ儒教の経典、『論語』・『孟子』を子供達に暗誦させることも行っている。そればかりでなく、「読経学校」といって儒教の経典を誦ませる学校も乱立した。その学校にも問題があつて、正式な認可を受けていない。そういう学校では正式な卒業資格がもらえない。

こうして儒教が復活したと言つても、いろいろな問題が起きてきた。国学大師も再評価をされてきたが、国学者が一種のアイドル扱いをされるといった変な現象も起きている。そういう中で、台湾・香港の儒家の影響を受けた大陸の若い人達も出てきた。

#### 四 現代大陸新儒家の出現

そのきっかけを作った一人が陳明で、二〇世紀末に『原道』という雑誌を作り、そこへ参加している人達が一世代前の新儒家のあとを継いで儒教を信奉し始めた。こういう人々を大陸新儒家と言われるようになった。

この仲間であつたが考え方の違いから別れていった人に蔣慶という人がいる。この人も最初は台湾・香港の儒学を継承していたが、これまで

の新儒家は心とか性とか個人の内面ばかりを問題にしてきた。「心性儒学」だ、それは一面にすぎない。儒教の本質は「政治儒学」にありとこらえ、「王道政治」を目指すのだと主張した。王道政治を実現するために儒学を国教にして国家を全面的に改造せねばならない。そして、二〇〇四年、その第一歩として児童を対象とした読経運動を始めた。この人の言っていることで、「儒家憲政」という

のがある。まず「虚君共和」といって一種の君主制、立憲君主制にするため孔子の末裔を中国の君主にすえようということを出した。そして、「大学監国」といって大学の中の儒者が国の政治を監督する仕組みを主張する。そして三院制を提唱した。

今の中国ではこういう主張をしても一向に逮捕をされない。それは一見突拍子もないことを言っているように見えるが、実のところ現在の中国の実態と大して違ひはないからである。

まず中国では普通選挙は行われていない。業界や政党の中で選ばれて国会に出ていく。また中国では宗教家とか学者とか映画俳優などが議員となつて出ている。選挙で選ばれた訳ではない。本人も知らないうちに国会議員になつている。実際に清朝の皇族の末裔が国会議員をしていた

りしている。

そして、共産党に関して蔣慶は何等触れていない。共産党の批判をしなれば問題はないのである。共産党の支配下で君主制を復活するのだと言っているように聞こえないこともない。まさしく今の政権が行き着く先は、蔣慶の主張する社会になるのかも知れない。

#### 五 おわりに

中国の儒教の状況は、良い所も欠点もある。儒家が復活したと言うけれど弊害もある。まず政治に近づき過ぎたことである。特に一昔前の現代新儒家に比べても、今の儒家は政治に近づき過ぎていて、何より独立の精神が足りないという気もする。

今、米中は厳しく対立している。アメリカなどは価値観の違いをあげて争うと言っているが、両者は価値観を争っているのではなく、共に国益を追求しているに過ぎない。価値観が異なれば逆に争いにならない。むしろ共通の価値観を持っているからこそ争いが起きる。

中国は世界に挑戦しようとしている。ひるがえつて我が国はどうか。日本人として国を正しく導くための学問を我々はしているのか。大陸に於ける儒学の表面的ではあるが隆盛する姿を見て、そう思わざるを得ない。

【徳風烈風】今学校がかかえる問題はあまりにも多い。従来からのいじめ不登校、道徳や情報等に関する教科の新設、GIGAスクール構想に伴うタブレット端末の全員配布、教師の働き方改革、それにコロナ対応が加わる。家庭でも子供への虐待、貧困問題等々と教え上げれば指も足らない▲菅政権は子供庁創設を急ぐが、対策はモグラたたきであつてはならず、教育の根本に立った統一的な施策が必要であろう▲よく言われるのは社会が急変し、時代の転換期に当たっているからだ。だがこれまでの学習指導要領はその変化に対応してきたはずであり、それでも解決が出来ていないのならば、根本からの反省があつてもよいのではない

か▲戦後教育を規定した教育基本法は日本人の育成という命題に込める事ができず、十五年前にようやく公共の精神、や、伝統文化の尊重が加わつた▲戦後最強の国となつたアメリカは国民に夢と希望を与えるため宇宙開発をふちあげ、物心共に繁栄へと導いてきた。その根底にはグレートアメリカという、人々を心から揺り動かす精神があつた▲我が国では、改定教育基本法の具体化こそ噴出する問題の根本的な解決を図る鍵となるのではないか。Y